



香港便り その17

香

港バレエは昨シーズン末に10人近いダンサーの退団を発表した。引退した者、新天地を求めて移籍した者がある中で、次の契約が結ばず辞めざるを得なかったダンサーも複数人いた。解雇された多くはプロ1〜2年目の若い女性ダンサーである。もちろん彼女たちも何百名の応募者から選ばれて入団を勝ち取った精鋭、いずれも国際コンクールで入賞したり、名門校を卒業したダンサーだ。彼女たちがなぜ次の契約が結ばなかったのか。それは監督や振付家の求める理想の体型維持に失敗したからだ。

バレエは視覚に特化したアートフォームである。振付家の美意識はダンサーの身長や体型にまで及ぶ。観客もダンサーにアスリートとしての体の幻影を求める。彼女たちは決して太っているわけではない。街に出ればスタイルのいい人と思われるだろう。現代のバレエ界が求める極限まで瘦せ細った体型にフィットしなかったのだ。だがそれを努力が足りなかったと言ってしまふのは危険だ。そもそも年頃の女性はホルモンバランスの影響で体型が変わりやすい。その上、親元を離れて見知らぬ国で競争社会に放り出されるのだから相当なストレスを抱えている。ボスからあと何キロ痩せると言われるだろう。しかしダンサーに求められるのは見た目的な痩せ型で

あるから、2、3キロ落としたいところを見た目が変わっていないければ評価も変わらない。そういった科学的知見に基づかない曖昧な要求は彼女たちを混乱させる一方で、拒食症に陥る女性ダンサーも少なくない。よく女性ダンサーが稽古の前に謝つてくることがある。「お昼たくさん食べてしまつてごめん」。彼女たちを持ち上げる男性ダンサーとしては、成人女性の体重に餃子1皿や2皿増えようが変わらないのに。むしろしっかり食べてパワーをつけてくれた方がいい。しかし、彼女たちにとって食べることは罪である、という考えが染み付いているのだ。

そもそも痩せ過ぎたダンサーは果たして美しいのか。オールドファッションのダンサーたちは決して痩せ過ぎた体型をしていなかった。むしろ筋肉質のガツリとしたダンサーが多かった。身体の美しさは痩せ型にのみ宿るわけではない。現代のダンサーの身体美の基準は主に男性振付家にリードされてきた伝統という名の閉ざされた空間の中で、彼らのフェティッシュによって育まれてきたところが多いのではないだろうか。

彼女たちと同世代の男性ダンサーたちは筋肉がまだ生育しておらず、ひよろひよろとした印象ですぐさま戦力になつていくとは思わない。彼らは筋肉が発達する数年後を見越されて評価されているのだから、女性ダンサーたちも体重の増減が落ち着く数年後を見越して評価されるべきではなからうか。それかサポートできる環境がないのなら若すぎるダンサーは雇うべきではない。太っていると云われ解雇されたとき、その言葉が彼女たちの将来にどう影響するか想像してほしい。経験の浅い若い女性ダンサーのケアを怠り、体型維持を根性論だけで個人に任せるのは無責任だ。

僕はこの10年間、才能溢れる女性ダンサーが外見へのプレッシャーから、健康を害したりキャリアを諦めざるを得なかった例を山ほど見てきた。もし彼女たちに的確なアドバイスができる専門家がいて、ボスにも理解があつたならば皆僕以上に輝いたキャリアを送っていたことだろう。彼女たちはこれからもおそらく黙ったままだから、代わりに僕は声を上げバレエ界全体の問題提起したいと思う。

Profile
2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

バレリーナと体型の格闘

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

